

委員長としての2年間を振り返って

Looking Back on My Two Years as Chairman

飯村 健次*
Kenji Iimura



読者の皆様、新年あけましておめでとうございます。巻頭言を第62巻第1号に寄稿できますことを大変光栄に感じながら書かせて頂いております。巻頭言として何を書くべきか色々悩みましたが、やはりこの2年間(正確には理事会で承認され、長きにわたり編集委員会委員長を務めてくださった広島大学・福井国博先生からバトンを引き継いだ2年に満たない期間ですが)の何ものにも代えがたい貴重な経験をお伝えして、今後粉体工学会誌を発行し続けていく中でご活躍頂くであろう皆さんにエールを送りたいと思う。

振り返ると、私はもう10年以上編集委員を務めている。スイス留学から帰国後、当時の編集委員長からお電話を頂き、若輩で何のお役にも立てないかもしれませんが、謹んでお受けいたしますなどと力士の口上のようなことを言いながらお引き受けした。以後自慢ではないが、1度も欠かさずに編集委員会に出席している。私が力不足であるにもかかわらず編集委員長に選任された一番の理由は、「あいつは暇で風邪一つひかない健康体だから」という理由であろうかと思う。枚挙に暇がないので歴代の編集委員長のお名前を列挙することは控えるが、錚々たる諸先輩方の後に続くということで私自身はプレッシャーであっぷあっぷの状態であり、周りの委員の方々からはこいつでホンマに大丈夫なんか?という真に泥船に乗った気分であったのではないであろうか。引継ぎ後の編集委員会の冒頭で、私に舵取りを任せると座礁しますので、是非皆さん助けて下さい、私が委員長に選ばれたのは、皆さんがしっかりしないとダメなんですよというメッセージだと思ってくださいというような挨拶をしたことを記憶している。以後、現在までの2年間大きな差し障りなく粉体工学会誌を発行できていることを編集委員の皆様感謝しつつ胸をなでおろしている。

始めてみて直ぐに、編集委員長の仕事とはこんなにも多岐に渡り、随所に気を遣わなければならないものかと気が付いた。投稿された論文や解説等の依頼原稿をハンドリングするエディターや校閲者を選任することは、一つの仕事であり、結構気を遣う。負荷が偏らないように配慮することはもちろんなのであるが、英文誌編集委員会の設立に伴い、メンバーに重複が無いよう調整してい

〈著者紹介〉

平成7年 京都大学大学院工学研究科化学工学専攻修士課程入学。
平成11年 同博士後期課程中退(後に論文提出により博士号を取得)。
平成11年 姫路工業大学工学部(現・兵庫県立大学工学部)産業機械工学科助手。平成21年 兵庫県立大学大学院工学研究科化学工学専攻准教授(現在に至る)。
趣味: ダイエット(結果は出ず。下手の横好き)

* 連絡先 iimura@eng.u-hyogo.ac.jp

く過渡期に和文誌編集委員会はあるため、一層の配慮が必要となっているかと思う。新規に編集委員会に召集される方々が決まったら仕事を一杯押し付けて左手で団扇を扇ごうと考えている今日この頃である。また、入稿予定日までに原稿が届かなかったときのハラハラ感は堪らない。一応の余裕を持って入稿期日をお知らせはしているのであるが、いつ催促をしようか、催促で気を悪くされることはないか、など気を揉むことになる。(この巻頭言が期日を過ぎての入稿であることは秘密である)

私が委員長を拝命してから積極的に取り組んでいるかも知れないと思っているのは、粉体工学会誌を会員により広く読んでもらうための啓蒙活動である。幸い学会のホームページの刷新に伴い、粉体工学会誌をホームページから簡単にアクセスできるようになり、またアクセスできるコンテンツもこれまでよりも大幅に広がった。実際には私はほとんど何もしていなくて総務理事の野村先生、和文誌担当事務局員の奥村氏のご尽力の賜物に他ならないのであるが、お手柄に相乗りさせて頂いている。論文はもちろんのこと、巻頭言から会告、おまけに四分法まで読むことが出来る。皆さんご存知でしたか? 会員限定の特典ではあるが、解説・技術資料の他、これまでの粉体工学の智の集約ともいえる講座・講義までが網羅されている。会員の皆様はこれを使わない手はないと思いますよ。パスワードの発行は直ぐに行いますので是非とも和文誌編集事務局(kaishi@sptj.jp)までご連絡下さい。私も使っておりますが、非常に便利です。今後の学生会員に対するペーパーレス対応を視野に入れると、現段階でオンライン公開がここまで出来ていることは非常に大きな意味を持つものと考えます。学生会員といえば、通称若手勉強会に出向いて諸氏に対して「粉体工学会誌読んだことありますか?」「どの記事に興味がありましたか?」「どんな記事なら読んでみたいですか?」などと色々聞いて回った。久しぶりに若者とお酒を飲みながらお話をして楽しかったのはもちろんであるが、やはりほとんど目に触れていないのだなあと痛感した。このオンライン公開を「嫌でも目に触れる」第一歩にしたいものである。

まだまだこれは辛かったなどという泣き言も書きたい気分ではあるが、割愛することとする。最後に、岐阜大学・東北大学の高井千加先生のお言葉をお借りして締めるとしよう。「私は粉体工学が好きだ」と第61巻第1号(2024年)に寄せておられる。私も粉体工学が好きだし、粉体工学会が好きだし、粉体工学会誌が好きだ。皆がそう思えるように、また粉体工学会誌を自分の雑誌だと思ってもらえるように努力したいし、その思いを皆でつないでいって欲しいと思っている。